



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聴取者にとっての演奏表現の芸術性 : テンポのゆらぎに焦点を当てて
Author(s)	張, 旭穎
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16981号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16981
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99825
Type	doctoral thesis
File Information	Xuying_Zhang_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名：張 旭穎

学位論文題名

聴取者にとっての演奏表現の芸術性：テンポのゆらぎに焦点を当てて

本論文の観点と方法

「芸術的演奏」とは何を意味するのか。この問いは、演奏科学および音楽心理学において繰り返し議論されてきた。しかし、演奏者の立場から語られる芸術性と、聴取者が知覚する芸術性とが必ずしも一致するとは限らない。とりわけ、演奏における全体的なテンポの違いや部分的なテンポのゆらぎといった時間的要因が、聴取者にどのように解釈され、芸術性判断にどのように反映されるのかについては、体系的な検証がまだ十分とは言えない。そこで本研究では、聴取者の視点に立ち、演奏表現における時間的操作が芸術性評価に及ぼす影響を実験的に検討した。その際、楽曲構造や和声からの芸術的印象影響を最小化するため、音階またはアルペジオからなる単純な旋律を刺激として用い、全体的テンポ、部分的テンポの操作位置および操作範囲を体系的に操作した。また、旋律における調性感の有無の影響を検討するため、長調・短調・無調という3種類の条件を設定するとともに、聴取者の音楽訓練年数の影響についても検討した。さらに、各演奏に対する聴取者の芸術性判断と「好み」「表情づけ」「上手さ」といった他の主観的印象との関連性も分析することで、複雑な芸術性判断の形成要因を、実験心理学の手法を用いて多面的に検討することの可能性と意義、および限界を論じている。

本論文の内容

第1章では、演奏を作曲—演奏—聴取のコミュニケーション過程として捉える理論的枠組みに基づき、演奏者の楽譜に対する独自の解釈に基づく時間的操作（いわゆる「音符のゆらぎ」または「芸術的逸脱」）が聴取者の知覚に及ぼす影響を先行研究から整理した。特に、プロの演奏家が一つの作品を機械的、芸術的、誇張的という異なる表情づけで演奏した音源を、一般聴取者が全て「芸術的」と解釈する傾向に注目し、楽曲自体の芸術性を排除しない限り、聴取者の芸術性評価に与える演奏要因を特定することは不可能であることを指摘した。さらに、芸術性評価が複数の印象次元と関連する可能性、および音楽経験が評価に及ぼす影響について検討し、本研究のリサーチクエスションと意義を提示した。

第2章では、長調の音階とアルペジオを用いた予備実験を通じて、音階やアルペジオという単純な旋律を用いた場合でも、全体的なテンポや部分的なテンポを操作することによって芸術性評価が変化することを実証した。また、旋律の音符数が評価に与える影響を検証し、実験で使用するのに妥当な音符数（30音）を解明した。

第3章では、30音からなる長調の音階またはアルペジオの旋律を用いて、全体的テンポおよび部分的テンポの操作が芸術性評価に与える影響を検討した。演奏には、実際のチェロの音色から人工的に合成されたチェロ音を用いた。その結果、音型にかかわらず、全体的テンポの主効果が認められ、低速条件が最も高く評価された。部分的テンポの操作位置では、とくに曲の終わりでのテンポのゆらぎが高く評価される傾向が見られた。さらに、操作範囲については、4拍条件が最も高く、次いで3拍、2拍の順で評価が低下した。これらの結果は、部分的テンポが長めの範囲で徐々に速度を落とし構造的終結点と結びつく場合に、芸術的表現として知覚されやすいことを示している。音楽訓練の影響は認められなかったが、全体的にアルペジオの方が音階よりも芸術的と評価された。これらのことから、芸術性評価は旋律を構成する音型と演奏における時間的要因に基づいて形成されることが示された。

第4章では、第3章の実験で用いた旋律を短調に置き換えて同様の検証を行った。その結果、全体的テンポがゆっくりで、旋律の終結に向かってテンポを徐々に遅くするような時間的変化が芸術性評価を高める傾向が、短調でも示された。また、短調でも音楽訓練の影響は認められず、アルペジオの方が音階よりも芸術的と評価されたことから、芸術性判断が旋律を構成する音型と演奏の時間的特徴に依存することが確認された。

第5章では、調性感（音階の構成音間に「安定（e.g., 終結感）」「不安定（e.g., 継続感）」などの機能的階層性を感じる）のない無調音階の一種である全音音階（i.e., 半音を含まず全音のみからなる音階）を用いて、第3、4章と同様の検証を行なった。ここでも、長調、短調の場合と同様に、芸術性評価に対する音楽訓練の影響は認められず、アルペジオの方が音階よりも芸術的と評価され、芸術性判断が旋律の音型と演奏の時間的特徴に依存することが確認された。

第6章では、第3,4,5章で得られたデータを用い、音型ごとに調性（長調、短調、無調）X 全体的テンポ（66, 96, 132 bpm）X 部分的テンポの操作位置（曲の始め、フレーズの終わり、曲の終わり）X 同操作範囲（2, 3, 4拍）の四要因分散分析を行い、これらの要因の影響を統合的に検証した。その結果、音階およびアルペジオのいずれにおいても調性の主効果は認められず、調性を含む交互作用も有意ではなかった。一方、全体的テンポ、部分的テンポの操作位置や操作範囲といった時間的要因は、調性に関わらず一貫した主効果を示した。すなわち、調性感の有無や旋律の音型にかかわらず、テンポが遅く、曲の終結に向かう減速が広めの拍数で実現される演奏に対し、より芸術的だと判断することが明らかとなり、芸術性判断が調性感や音型よりも時間的構造に強く依存していることが再確認された。

第7章では、演奏に対する芸術性と「好み」「表情づけ」「上手さ」の印象との関係を検証した。音階・アルペジオのいずれにおいても、芸術性は「好み」および「表情づけ」と非常に高い正の相関を、「上手さ」とは中程度以上の正の相関を示した。つづく単回帰分析においては、芸術性評価に対する高い説明力を「好み」「表情づけ」の評価それぞれが示し、「上手さ」の評価も一定の説明力を示した。これらの関係性をパス図に表した。

第8章では、以上の結果を総合し、本研究の意義と限界を論じた。本研究は、単純な旋律を用いてテンポを操作することにより、一般聴取者でも音源から演奏の芸術性を相対的に評価可能であることを世界で初めて実証した。本研究で用いた実験心理学的パラダイムは、音楽を鑑賞する際に抱く様々な印象の形成要因を体系的に解明する際に応用可能であり、今後の音楽心理学研究へ一つの道筋を示したことの学術的意義は大きい。その一方で、本研究が本学の学生を標本とした複数の実験・分析を通して繰り返し示した、「テンポが遅く、曲の終結に向かう減速が広めの拍数で実現される演奏に対し、より芸術的だと判断する傾向」が、他の大学生や大学生以外の標本でも再現されるか、あるいは他の音色の単旋律でも再現されるか、ハーモニーを伴う複旋律ではどうかなど、今後検証される必要がある。また、タイミングや強弱、アーティキュレーションなど他の表現要素が芸術性評価に及ぼす影響についても検討する必要がある。これらの検証を進め、その知見を演奏家にとっての芸術性に関する知見と統合することで、「芸術性」という抽象的かつ曖昧な概念を、より具体的に定義し、包括的に理論化することが可能となろう。